

序

今年度、大学の再編により、旭川校は生涯教育過程が廃止され、教員養成に特化された。今年度は、社会学ゼミも新たなスタートの年となる。

5月、新たに3名の新入生と、転ゼミ生1名が加わり、過年度生2名、4年生4名、3年生4名、2年生3名、1年生3名の合計16名の体制で出発した社会学ゼミは、9月に過年度生2人が無事卒業し、4年生4名も無事卒論を提出した。新たに加わる者と去る者、学校という組織には必然のこととはいえ、どこことなく寂しさを感じる。

今年度の前期は、関満博／長崎利幸の『市町村合併の時代 中山間地域の産業振興』（新評論，2003）をテキストとして、全国10ヶ所のまちづくりについて学んだ。特に、「成功例」を列挙した本テキストの事例では、後背地が地域振興の鍵を握ることが明らかになるとともに、農業所得の増大という点において、多品種少量生産への転換に加えて、ロットの制約を乗り越えるために、また、販売単価を高めるという点からも、近隣市町村の住民をもターゲットとした直売所が有効に機能することが有益であるということが理解された。

夏期休暇中には、8月26日～27日にかけて、積丹半島にゼミ旅行に出かけた。海庄や積丹町市街の寿司屋などで食事を堪能した他、島武意海岸やニッカ余市工場に立ち寄ったりして楽しんだ。この冊子は、例年と同じように、ゼミ旅行先の一つである積丹町についてまとめたものである。

後期の作業は、新たに加わった4名の学生による積丹町レポートである。今年度は総体的に金曜日のゼミの時間がさまざまな行事等につぶれる日が多く、ことに後期はそれがはなはだしかった。したがって、後期の活動は、積丹町レポートに特化されてしまった感がある。

社会学ゼミは、他のゼミに比べると「縛りが少ない」ようである。が、それでもこうして毎年ゼミ旅行先のレポートをまとめることが出来ているということは、決してばらばらではないということの証であると思いたい。ことに今年度は、ゼミ生を中心とした北海道のまちづくりアンケートの敢行など、いつも以上にゼミの「結束」を感じるが多かったように思う。

来年以降も、よりアクティブなゼミになることを祈念して。

角